

『アエネーイス』におけるマルケッルス追悼の詩句について

山沢孝至

クーマエの巫女シビュッラの導きを得て冥界に降ったアエネーアースは、エーリュシウムの野で亡父アンキーセースと再会し、父から靈魂輪廻の法則とこの法則に従ってやがて時到来れば子孫として地上に肉体をもって生まれ出ることになっている数多の靈の名およびその地上での事績を開示される。

『アエネーイス』第6巻の大部分を占めるアエネーアースのこの冥界行は、ほかならぬアンキーセースの指示によるものであり、アンキーセースが息子との再会を願う目的は、子孫たるローマの英雄の教示にあった。すなわち、第5巻でアンキーセースが息子の夢枕に立って冥界行を促したとき、これによってお前はお前の子孫すべてとその住まう町々を知ることになろうと付言しているのである⁽¹⁾。さらに、漸く父子再会が成って感極まった喜悦の言葉が互いに交わされたのち、アエネーアースの問いに答えてアンキーセースが蜜蜂の如く群れ集う靈の素性を明かす際にも、これらの靈のことをお前に語り、我等が子孫を数え上げて、それだけ一層お前がイタリアを発見した喜びを自分と分かち合えるようにするのが、かねてからの自分の願いだったと言い添える⁽²⁾。

このようにして導入された「ローマの英雄のカタログ」(6.756-886)⁽³⁾は、当然のことながら、『アエネーイス』第6巻のクライマックスとして構想されており、じじつローマ青史に名を成した傑士が次々と登場するさまは壮麗な一大ページエントの観を呈する。まことに、この一節は、『アエネーイス』の中でも、とくにウェルギリウスが詩魂を傾注して入念に創造したエピソードであつたろう。

アンキーセースが小高くなった所に立ち、列を成してやって来る靈たちをうち眺めつつ、最初に指し示すのは、ラーウィーニアによるアエネーアースの子シルウィウスとなるべき靈である。その子孫の系譜がアルバの王たち

を経てローマの創建者ロームルスへと連なると、ここにおいて「ローマの第二の創建者」アウグストゥス⁴⁾が紹介され、その世界制覇の偉業が讃えられる(767-807)。次いで、ロームルスにつづく第2代の王ヌマでもって再びクロノジカルに始められたカタログは、共和政時代の英雄、カエサル、ポンペイユス、カトー（ケーンソルの）、グラックス兄弟等を数え上げたのち、「ローマの再興者」ファビウス・マクシムスに至り(808-846)、アンキーセースは未来のローマ人に宛てて‘*parcere subiectis et debellare superbos*’を結語とするかの有名な訓戒を声高く叫ぶ(847-853)。

ところが、ウェルギリウスはカタログをここで終わらせない。アンキーセースが新たにポエニ戦役の勇将 マルケッルス を指してその勲を述べると(854-859)、それまで黙して耳を傾けていた（と思われる）アエネーアースが初めて口を開き、この者に随行する暗い翳りのまわりつく若者は誰なのかと尋ねる。

atque hic Aeneas (una namque ire uidebat 860
egregium forma iuuenem et fulgentibus armis,
sed frons laeta parum et deiecto lumina uultu)
‘quis, pater, ille, uirum qui sic comitatur euntem?
filius, ane aliquis magna de stirpe nepotum?
qui strepitus circa comitum! quantum instar in ipso! 865
sed nox atra caput tristi circumuolat umbra.’ (Aen.6.860-866)⁵⁾
するとこのときアエネーアースは——というのも、凜々しい姿と
光り輝く武具で立ち優ってはいるが、額は聊かも悦ばしげでなく、
伏目がちな若者が同行するのを目にとめていたからだが——
‘父よ、歩み行く勇士にあのように伴をするのは誰なのか。
息子か、それとも子孫の偉大な族のうちの誰かなのか。
まわりに付き従う者らのなんというざわめき。彼自らはなんという体軀。
だのに黒い闇が陰気な翳りで頭を包んでいるのは。’

すると父アンキーセースは涙ながらに、それがローマ人の期待を一身に集

めながらも若くして世を去らねばならぬ定めにある人物の霊であることを告げてその人徳を称揚したあと、最後になってようやくその名（マルケッルス——実はさきのマルケッルスの同名の子孫にして、アウグストゥスの甥）を明かし⁶⁾、あたかも自らその葬儀に列になっているかの如く、せめてもの手向けの花を乞うのである。

'o gnate, ingentem luctum ne quaere tuorum;
ostendent terris hunc tantum fata nec ultra
esse sinent. nimium uobis Romana propago 870
uisa potens, superi, propria haec si dona fuissent.
quantos ille uirum magnam Mauortis ad urbem
campus aget gemitus! uel quae, Tiberine, uidebis
funera, cum tumulum praeterlabere recentem!
nec puer Iliaca quisquam de gente Latinos 875
in tantum spe tollet auos, nec Romula quondam
ullo se tantum tellus iactabit alumno.
heu pietas, heu prisca fides inuictaque bello
dextera! non illi se quisquam impune tulisset
obuius armato, seu cum pedes iret in hostem 880
seu spumantis equi foderet calcaribus armos.
heu, miserande puer, si qua fata aspera rumpas!
tu Marcellus eris! manibus date lilia plenis
purpureos spargam flores animamque nepotis
his saltem accumulem donis, et fungar inani 885
munere.'

(Aen. 6. 868-886)

‘おお倅よ、お前の一族の途方もない悲しみの理由を訊ねるな。
この子を運命は地上にただ見せるのみ。それ以上留まることを
許してはくれぬだろう。ローマの裔があなた方には余りにも、
天上なる方々よ；力あるものと映った筈、もしこの授けものが永くロー
マのものであったなら。

人々の何と甚だしい慟哭をあゝの野がマルスの大いなる都へと
駆り行くことになるか。あるいはまた何という弔いを、ティベリスの河
よ、

あなたはご覧になることか。真新しい塚の前を流れて行かれる折に。
イーリオンの族に出る子で、ラティウムの父祖たちをこれほどまでに
希望に奮い立たせる者は誰一人なかろうし、ロームルスの地が
いつの日にも誰かその養い子のためにこれほどまで雀躍することもな
かろう。

ああ徳義を知る心よ、ああ古の信義、また戦に敗れることなき
右手よ。あの子が武具を纏うや何人もこれに立ちはだかつて
無事には済まなかったろうに。徒歩にて敵陣へと踏み込むときであれ、
泡をとばす馬の横腹に拍車をかけるときであれ。
ああ、哀れな子よ、お前がどうにかしてつれない定めを打ち破ってくれ
たなら。

お前はマルケッルスとなるのだ。手一杯に、お前たち、百合をくれ。
赤き花を撒こう。我等が裔の魂に
せめてこの贈り物を山と捧げ、甲斐なきつとめを
果たそう。’

アンキーセースのスピーチはここで不意に閉じられる。ローマの英雄を長
長と数え上げて（計 130 行に及ぶ）意気揚々とした結句に達したかにみえ
たカタログは、こうして涙とともに思いがけない幕切れを迎える。なぜ詩人
は最後にこのような悲調を添えたのか。アンキーセースが後裔となる未来の
ローマ人の偉容を語り聞かせる目的は、アエネーアースを鼓舞することにあ
ったはずだが、それは徒労に終わったのか。しかしそれにしても父子ともど
も意気沮喪した様子は見られない（これにすぐ続く vv. 886-892 には父子の
逍遙が描かれ、アンキーセースは来るべき名声への意欲によって息子の心に
火を点けたと言われるのであるから）。ではマルケッルスは付け足しに過ぎ
ないのか。しかし詩人はアウグストゥスに費やした 15 行を上回る、カタロ
グ中最多の 19 行をこれに充てている^(6a)。決して単なる余録ではない。

詩人はなぜマルケッルスを登場させたのか——この疑問に答えようとした論説は少なくない⁽⁷⁾が、管見の限り、ほとんどが作品の内部でのみその解決を探ろうとする論であって、現実のローマ世界と自己の作品内部の世界と、その両方を見据える詩人の眼差といったものについて余り注意が払われていないように思われる。

さきにアンキーセースの振舞について、「あたかもこの若者の葬儀に列になっているかの如く」と言った。たしかにマルケッルスについて語るアンキーセースの科白の中には、弔いそのものの情景がはっきりと2度にわたって立ち現われる。vv.872-874 はマルケッルスの葬儀を巨視的に眺め、ローマ人の葬礼につきものの喧騒と、都を貫いて悠然と静かに流れる河の対比の中に、青年の死を悼み、かつは人事の儚さと時の流れの永続性に思いを致させる⁽⁸⁾詩行であるし、供養の花を棺に投げるのもやはりローマの風習であった⁽⁹⁾。明らかにアンキーセースは、まだ生まれてもいない子孫が地上の生の締め括りとして与えられる儀式をはや空想し、涙にむせんでいる。いや、そればかりか、マルケッルスを悼む詩句がそもそも *epicedion* として、すなわち追悼演説として、修辞学の作法に則って書かれているとの説もある。その代表的な論者は Norden であって、Norden はギリシアの修辞学者メナンドロスの作と伝えられる『演説法指南』中の「追悼演説の部」⁽¹⁰⁾が教えるところと照らし合せて考証を行ない、「運命と神々の不正」・「故人に寄せられた期待」・「故人の性格(*physis*)と業績(*praxeis*)」・「聞き手の憐れみを誘う嘆き」・「葬儀の盛大さ」などのトポスは勿論のこと、間投詞 '*heu*' の使用さえもがいかにレトリックの要求に忠実に応えたものであるかを示そうとした⁽¹¹⁾。しかし De Ruyt も言うように⁽¹²⁾、ウェルギリウスへの修辞学の影響を主張する Norden が拠り所とする伝メナンドロスの著作は恐らく紀元後3世紀(しかもその後期)の作であり、両者の間には300年もの時間的隔たりがあるのであるから、これを単純に比較対照することはアナクロニズムを免れないであろう。

Norden はまた、これとは別に、「英雄のカタログ」全体のモデルとして『イーリアス』第3歌の「城壁よりの物見」(所謂 '*Teichoskopia*') を挙げ

る。トロヤの城壁からギリシア方の将帥、アガ멤ノン、オデュッセウス、アイアースを順に指し示しながらあれは誰かと問う老プリアモス王に、ヘレネーが逐一返答する情景が、ちょうど我々が問題にしている場面と似かよっているというのである⁽¹³⁾。しかし、指差して紹介される英雄の人数が桁外れに違う点をさておくとしても、なお、Skard の如く異義を唱えることができよう⁽¹⁴⁾。ホメーロスの「城壁よりの物見」がトロヤ側からみた敵将の評であるのに対して、また、そこに集うギリシアの武将たちは皆同じ一つの時代を生きているのに対し、アンキーセースとアエネアースの眺める霊は何百年にもわたって連綿と続く彼らの後裔であり、形式の上での類似性は認めてよいとしても、その中味はかなり違っていると。

いずれにせよ Norden の論は、カタログ全体の構造をホメーロスから、その最後に置かれたマルケッルス之死を悼む一節をギリシアの修辞学から、従って、ともにギリシア世界から借用したモデルによってウェルギリウスがこの一節を創作したとする説であった（比較的最近の研究である Knauer の大著において⁽¹⁵⁾も、ウェルギリウスはここでホメーロスに多くを負っているとされる。ただし、アエネアースの冥界行がオデュッセウスの冥界行の模倣であることを基本に、「ローマの英雄のカタログ」が肉親との再会のあとに置かれている点、これは『オデュッセイア』第11歌の「名婦のカタログ」に想を得たものと考えられるという）。

これに対し、ギリシア人とローマ人では歴史観が異なり、また何よりも行動の規範を神話に置く（ギリシア人）か、父祖たちの習わし（*mos maiorum*）あるいは模範（*exemplum*）に置く（ローマ人）かの決定的な違いがあるゆえ、ローマ史に取材したウェルギリウスのカタログのモデルはやはりローマ世界に求めなければならぬ、と考えたのが、いま名を挙げた Skard である。そして実際、Skard は「英雄のカタログ」とその最後に置かれた「マルケッルス哀悼の句」とに一貫するモデルをローマ社会に見出した⁽¹⁶⁾。‘*pompa funebris*’（野辺の送り）と‘*laudatio funebris*’（追悼演説）がそれである。Skard の言葉によると、「英雄たちがそばを通り過ぎる間アンキーセースが息子に語り聞かせる説明的なスピーチは、死者を讃える演説 すなわち *laudatio* と捉えることができる。しかし行進（パレード）そのものは、祖

先のパレードを伴うローマの或る葬儀をウェルギリウスが体験したことから成立したのである⁽¹⁷⁾」

一体、こと葬礼に関する限り、ローマ人はギリシア人とは大きく異なった習俗を有していた。その様子を伝えるギリシア人ポリュビオスの筆致(6.53-54)にも、彼の驚きが現われている。ローマの名家は、一門に属する者たちのマスク(デスマスク)⁽¹⁸⁾を家に飾っており、一門の中から新たに死者が出ると、近親のうちこれら先祖に最も似かよった体軀をもつ者がそれぞれにこのマスクを被り、そのうえ、consul, praetor などかつて高位にあったときの職章と礼服に威儀を正して、生前の姿そのままに葬列に加わって死者の先導役を務めるのである⁽¹⁹⁾。これはまさにウェルギリウスが登場させた英雄の霊の姿である。地上へ生まれ出る前の霊がすでにその実人生での絶頂期の姿をしているというのは、考えてみれば奇妙な話だが、こうした「蘇った」父祖たちの行列がそのモデルになっているという事情からすれば、むしろこれは当然そうあるべきことになる。過去何代にもわたる、同じ家系に属する錚々たる名士がうち連なって歩むさまは蓋し壮観であつたに違いない。そして、こうした「歩み」を表わす動詞は、「英雄のカタログ」中に頻出するのである⁽²⁰⁾。

一方、追悼演説について、ポリュビオスは亡骸が forum の rostra(演壇)のところへ運ばれた後、故人の息子もしくは一族のうちの適任者がこの演壇に登り、故人の人徳と生前の業績を讃える演説を行なうと伝えている。アンキーセースが小高くなった所(tumulus)の上に場所を占めてからスピーチを始めるのは、これを踏まえているのである⁽²¹⁾。演説内容の順序に関しては、ポリュビオスの記述では(すなわち紀元前2世紀には)故人となった人物についてまず語り、同族の先祖への称賛がこれに続いたとなっているが、これがいつの間にか逆転し、アウグストゥスの頃には、弔辞の冒頭部において先に故人の父祖に言及するようになった⁽²²⁾。ウェルギリウスは、たとえ結果的にであれ、この順序をも守った。なぜなら、「英雄のカタログ」の中の最も新しい死者はマルケッルスであり、詩人がアンキーセースの口をかりて再現してみせた葬儀は、マルケッルスのものに他ならないことが、最後に明らかになるからである。アンキーセースがうち沈んだ様子のマルケッルスを見

て心に思い描いたこの若者の葬儀は、従って、驚くべきことに、「英雄のカタログ」の開始と同時に始まり、我々がそれと気付かぬまま進行していたのである。しかも、Skard は、ウェルギリウスがモデルとしたのは当のマルケッルスMarcellusの葬儀だったと考える⁽²³⁾。

この Skard 説は、ウェルギリウスの叙事詩とローマ日常の風俗との不可分な関係に改めて我々の目を開かせてくれたという点で、画期的な研究であった。スウェートーニウスに遡るとされるウェルギリウスの伝記によると(Suet.-Vita 32), 『アエネーイス』朗読会にアウグストゥスとともに居合せていたマルケッルスの母 オクターウィアは、*'tu Marcellus eris'* の句のところで卒倒し、やっとのことで生気を回復したというが、彼女の受けた衝撃も、上の事情からすれば容易に理解できる。ローマの過去の栄光を体現する英雄の数々を謳歌するかにみえたアンキーセースのスピーチが、実はつい最近世を去ったばかりの愛息への追悼演説の模倣・再現に他ならず、詩人が熱をこめて朗読してきたローマの父祖たちの偉容は何とあの折の葬儀のさまたったと知った時の彼女の驚きは、まさしくそのようなものだったに違いない⁽²⁴⁾。

もっとも、Skard 説は若干の問題がない訳ではない。上述のような葬儀のさまは、ローマにあつては日常的に見られた光景であつたから、ウェルギリウスがモデルとしたのがマルケッルスその人の葬儀であつたと殊更に限定する必要はないかもしれない⁽²⁵⁾。また、Skard は無論 マルケッルスの歿後程なく『アエネーイス』第6巻が書かれたと考える⁽²⁶⁾のだが、『アエネーイス』の成立にまつわる伝承とマルケッルスの死没の時期とを突き合せてみると、逆にマルケッルスの亡くなったとき既に第6巻が出来上がっていたこともあり得るから、速断は許されないはずである⁽²⁷⁾。しかも、『アエネーイス』についてしばしば指摘される筋書あるいは叙述の矛盾といった厄介な問題が、この第6巻、しかも「英雄のカタログ」の件にも認められ、マルケッルス追悼の一節はこの青年の死後、追加挿入された（さらに、その際、先行部にも多少の改変を伴った）と考える学者も多いのである。

例えば、Cartault⁽²⁸⁾はマルケッルスの一節が元の構想にはなかった付け

足しであると断ずるが、その論拠として直後のパッセージの呈する文脈上の問題を指摘する。アンキーセースらの逍遙を語る vv. 886-887 は詩人が予め設定した「ローマの英雄のカタログ」のシチュエーションになじまない。なぜなら、彼らはこの間動いていないのであって、そもそもアンキーセースは小高くなったところに地歩を占め、そこへ列をなしてやって来る霊たちを指し示しつつアエネアースに教示をしていたはずである。その場からの移動はいまだ語られていない。にも拘らず、v. 886 以下には彼らが一帯を経巡りつつ未来の英雄たちの霊を検分していたことがいわれる⁽²⁹⁾。これは不可解であって、いつの間にか状況が変わったと判ずるよりない⁽³⁰⁾。また、v. 889 'incenditque animum famae uenientis amore' の句は、アエネアースを鼓舞する要素の見当たらないマルケッルスのエピソードのあとでは、場違いなものであるという。たしかに我々は、この1行をアエネアースの受けた感化の要約として評価する Albrecht と R.D. Williams の言⁽³¹⁾、あるいはこの行を v. 806 以下に関連づける Servius の古註(ad Aen. 6. 889) の着想にも拘らず、Cartault と共に、この v. 889 は論理的にみて本来「英雄のカタログ」のうちアンキーセースのローマ人へのメッセージまでの部分(v. 853 まで)を締めくくる句だに見做さざるを得ない。マルケッルスの一節が初めからあったか、加筆によるのか、微妙な問題であるが、少なくとも、後続部との調和が決して十全とはいえないことはたしかであろう。

それではなぜウェルギリウスが、前後の脈絡を多少なりとも犠牲にしてまで、この薄命の青年を登場させたのか。初めの設問に戻ることになるが、この問題について残念ながら Skard は殆ど触れていない。そこで、Skard 説を基本に、ローマ社会の情勢との関連でこの問題を考えることを我々の残りの課題としたい。まず、そもそもマルケッルスとは如何なる人物であったのか。

マルケッルスがその生き生きとした姿を最初に文献に現わすのは、前29年に催されたアクティウムの海戦の祝勝祭の模様を伝えるスウェートーニウスの記述(Tib. 6)においてである。このときマルケッルスはアウグストゥ

スの凱旋車の右の副え馬に、のち皇帝となるティベリウスは左の副え馬に乗ったという。次いで、前27年には、アウグストゥスがこの二人をカンタブリア遠征に伴った。その直前、ギリシア人の学者アテーナイオスがその著『攻城具について(Peri mēchanēmatōn)』をマルケッルスに捧げている⁽³²⁾。マルケッルスは前25年、アウグストゥスに先立ってローマに戻ったが、これはアウグストゥスの娘のユーリアとの婚礼のためであった⁽³³⁾。実際、アウグストゥスはこの婚礼をかなり慌ただしく準備したふしがあつて、自らは病のために帰国が叶わず、アグリッパに差配をさせた⁽³⁴⁾。ローマへの帰途、マルケッルスは depositio barbae の儀式を執り行なっている。成年に達した証に初めて髭を剃ってこれを神々に奉納するのである⁽³⁵⁾。アウグストゥスがこの儀式を祝ったのは24歳の年と伝えられるが(Dio 48.34.3)、マルケッルスについては、生年を通説に従って前42年とすると僅か17歳であったことになる。恐らくこうした実情も、事の慌ただしさを示すものであろう。この折、ミュティレーネー出身のギリシア詩人クリーナゴラスがエピグラム一首(Anth.Pal.6.161 = Page 10)を捧げており、そこには、

hesperíou Márkellos anerchómenos polémoio
skylophóros kranaês télsa pár' Italiēs
xanthēn prōton ékeire geneiáda. bouleto patrís
houtōs kai pémpsai paída kai ándra labeîn.

マルケッルス、西方の戦より戦利の品を携え戻る折しも、

岩がちなるイタリアの国境にて

初めて黄色き髭を剃りぬ。祖国は斯く

小児を送り出し丈夫を迎え入るるを望みたりき。

とうたわれている〔原詩の引用にあたっては、ギリシア文字をローマナイズした〕。また、これとほぼ同時期に書かれたとされる、やはりクリーナゴラスのもう一首のエピグラム(Anth.Pal.9.545 = Page 11)には、マルケッルスがギリシア神話の英雄テーセウスの力と名声を得るようにとの願いが表明されている(クリーナゴラスは、ローマに長期の滞在をし、マルケッル

スの母オクタウィアの文学サークルに親しく出入りしていた)。

アウグストゥスが前24年ヒスパニアから帰還したのちには、マルケッルスは、10歳早い特例として、propraetor 格の元老院議員となって consul に立候補する権利を与えられ、それと同時に aedilis に選ばれた (Dio 53.28.3)。こうして、マルケッルスは多くのローマ市民の目にはアウグストゥスの後継者と映ったのである⁽³⁶⁾。なるほど、アウグストゥスは彼を後継者として名指しする機会があつたにもかかわらず、そうしなかった。しかしそれは、反対勢力と十分に渡り合えるだけの実力を身につけないうちは時期尚早ではないかとアウグストゥスがためらったからだと言われている⁽³⁷⁾。実際、アウグストゥスはこの甥を民衆の間の人気者にしようと、さまざまな手を打っている。先述のアクティウムの戦勝祝賀祭の折、国民に与える施し金(祝儀)の支給対象をマルケッルスの名で11歳以下の子供にも広げたし (Dio 51.21.3)、カンタブリア遠征のさなか、タッラコーの陣営でマルケッルスとティベリウス二人の名で兵士たちに競技会を催させた (Dio 53.26.1)。マルケッルスが aedilis となった年には、'Ludi Romani' を主催させ、このときには、いつもどおり劇場が天幕で蔽われたほか、快適に散策できるよう forum の上にも天幕が張られたのだった⁽³⁸⁾。これらの施策は、当然、民衆の好意がマルケッルスに集まるよう狙ったものであつて、恐らく期待どおりの成果を収めたと思われる⁽³⁹⁾。このようにして民衆の目にこの青年が好ましく映り、次代のローマの統治者としての期待が醸成されていったものであろう。

アウグストゥスは、次代の統治者となる人物にはユーリウス氏属の血の継承が必要と考えていたようであり⁽⁴⁰⁾、甥マルケッルスこそ最適の候補だった。アウグストゥスのこの意向を、詩人たちも敏感に感じとっていた⁽⁴¹⁾。

そして実は、「ローマの統治者」という概念は、『アエネーイス』第6巻の「ローマの英雄のカタログ」においても重要な構成理念なのである。その本質からすれば「ローマの英雄のカタログ」という呼称はあまり適切とは言えない。むしろ「ローマの統治者のカタログ」と言うべきなのである。なぜなら、アルバ・ロンガの四人の王とローマの五王は言うまでもないが、共和政時代の英雄も、初代の consul たるブルトゥスを筆頭に、名の挙がつて

いるほぼ全員が consul ないしは dictator としてローマの支配権の頂点をきわめた人物であるからである。これに対して、ローマの統治者の人脈をはずれたところにいる者は、ただの一人もあげられていない。このことは、『アエネーイス』第8巻の「アエネーアースの盾の図」と比較するとき、一層明瞭に理解されよう。盾の図も同じようにアエネーアースにとって未来のローマの栄光を謳歌するものであるけれども、そこに姿の見えるコクレース、クロエリアといった人物は、如何に有名であろうと第6巻の「英雄のカタログ」に含めるに足るだけの地位にはなかったのである⁽⁴²⁾。

従って、このような構成原理をもつ「英雄のカタログ」にマルケッルスを含めることは、とりもなおさずこの若者を「ローマの統治者」たるにふさわしい人物として遇することを意味する。ウェルギリウスはマルケッルスを中心に未来を嘱望された青年として描いたのではなく、アウグストゥスを継ぐべき者として扱った。詩人が「英雄のカタログ」にマルケッルスを登場させたのは、このように彼を次代の指導者となるべかりし人物と見做してのことであり、これは、逆に、（自身をも含めて）彼に期待を寄せていた多くのローマ市民が、そして誰よりも当のアウグストゥスとオクターウィアが、その急逝に際して味わったであろう大きな落胆を代弁するものであったはずだ。その落胆を落胆として、詩人は思う存分のパトスを籠めて言葉に表現した。恐らくマルケッルス哀悼の一節を書くにあたっては前後の脈絡に配慮をする必要を忘れ、ローマの葬礼（マルケッルスその人の葬儀か？）のイメージに導かれるままに創作を進めたのではあるまいか。そして、vv. 886-887 は、（これに続く vv. 888-892 をも含めて考えるべきかもしれないが）もし真正なものであるとすれば、あらぬ方向に外れてしまった叙述の軌道を何とか元へ戻そうと、すなわち未来の啓示によるアエネーアースの鼓舞と、やがて始まろうとするラティウムでの戦争への準備に向けようとした詩人の絶望的な努力なのではあるまいか。Mackail に紹介されている⁽⁴³⁾が、vv. 885-886 の詩行の渡り(enjambement)は、*'his cumulem donis et munere fungar inani'*と書き改めれば文意をほとんど変えずにこの enjambement を避けることができる。詩人がそうしなかったのは、*'saltem(せめて)'*の一語に万感の思

いを籠めたかったからであろうし、また哀悼の句がもの悲しい余韻を響かせることを望んだがためであろう。

ウェルギリウスが逝ける青年に捧げた詩句は、多く戦士のイメージを伝える。マルケッルスの場合、その早逝のため、当然これといった事績も現実には数えられないのであるから、英雄叙事詩の枠組みの中で「ローマの統治者」として遜色のない人物像を描き出すには、やはり武勇というものを強調するのが一番であっただろう。実際に、アウグストゥスのカンタブリア遠征に参加しているのであるから、尚更である。そこで現実にはこの青年が何らかの武功を樹てたかどうかは、ここでは問題ではない。さきに引用したクリーナゴラスのエピグラムにもマルケッルスが「戦利の品を携え (skylophoros)」ヒスパーニアの戦より戻ると言われた。17歳の若者が実戦において何らかの手柄を樹てたとも思われぬにも拘らず、である。詩の巧拙を別にすれば、戦士としての力量が大いに称賛されているウェルギリウスのマルケッルス像も、その精神は同じなのである。

もし我々が詩作品の中にマルケッルスの現実の姿を求めようとするならば、むしろ次のプロペルティウスの詩に向かわねばならないのは、自明のことであろう。

quid genus aut uirtus aut optima profuit illi

mater, et amplexum Caesaris esse focos?

aut modo tam pleno fluitantia uela theatro,

et per maternas omnia gesta manus?

occidit, et misero steterat uicesimus annus:

15

tot bona tam paruo clausit in orbe dies.

i nunc, tolle animos et tecum finge triumphos,

stantiaque in plausum tota theatra iuuent;

Attalicas supera uestis, atque omnia magnis

gemmea sint ludis: ignibus ista dabis.

20

sed tamen huc omnes, huc primus et ultimus ordo:

est mala, sed cunctis ista terenda uia est. (Prop. 3.18.11-22)

生れや美德や、何にもまさる母君が、あの方にとって

何の役に立ったのでしょうか。カエサル家の竈を抱擁したことも、

そのほか、ついこの間あんなに人で溢れかえる劇場に波打っていた天幕と、

母君の手で為し遂げられたことすべてが、

逝ってしまわれた。お気の毒に、二十年めの齢が歩みを止めてしまった。

こんなに多くのすぐれたものを月日はかくも小さな廻りの中に閉じ込めたのだ。

さあいまこそ、意気を高くもち、あなたの心に凱旋式を思い描かれよ。

劇場総立ちになって拍手喝采するのがお気に召しますように。

アッタルスの錦の衣を凌がれよ。そしてまた、偉大な祭典の中で

すべてが宝石で飾られるがいい。そのようなものを、あなたは火に投ぜられるでしょう。

けれど、そうは言っても、ここへはあらゆる人が、ここへは貴人も下人もやって来ます。

厭な道だ。でも人は皆悉くそんな道を踏み行かねばならないのです。

ここでプロペルティウスが母オクターウィアの庇護・後見と ‘Ludi Romani’ 祭でのマルケッルスの人気を強調しているのは、ウェルギリウスの無双の勇士としてのマルケッルス像と実に見事なコントラストをなす。また、プロペルティウスと違って、ウェルギリウスは誰しも考えつくような、あとに遺された者に対する慰めの言葉を盛り込まなかった（言うまでもなく、追悼詩あるいは追悼演説ににそうした文句を入れるのは常道であった）。ローマは掛け替えの無い若者を失ったというのがこの詩人の感慨であったのだ。まことに、アウグストゥスとオクターウィアの悲嘆のさまは尋常のものではなかった⁴⁴⁾。これはウェルギリウスを動かさずにはいなかったであろう。

なるほど、いかにもウェルギリウスのマルケッルスは過度に美化され理想化されている⁴⁵⁾。しかしながら、それは結局のところこの薄命の若者が当時の作家から得た最も真情溢れる追悼文であることは間違いないので

ある(46)。

注

(1) 'tum genus omne tuum et quae dentur moenia disces' (Aen. 5.737). これは実際、Norden の言うとおり「英雄のカタログ」の要約である (E. Norden, Aeneis Buch VI, Darmstadt 1976 [= 1957], 347)。

(2) 'has equidem memorare tibi atque ostendere coram / iampridem, hanc prolem cupio enumerare meorum, / quo magis Italia mecum laetere reperta.' (Aen. 6.716-788). なお, cf. Aen. 6.756-759.

(3) ドイツ語圏では 'Heldenschau' (訳せば「英雄の査閲」) と呼びならわされている。本稿では便宜のため、「(ローマの) 英雄のカタログ」とする。

(4) Suet. Aug. 7, A. Alföldi, Der Vater des Vaterlandes im römischen Denken, Darmstadt 1978 (= MH 8 [1951], 212-215) 参照。

(5) ウェルギリウスからの引用は概ね R. A. B. Mynors 校訂のテキスト (OCT版) に拠ったが、他の校本に従って一部改変した箇所もある。

(6) これは、同じく他の英雄に比して多めの詩行を充てられているアウグストゥスの場合 (vv. 791-805, 計15行), その名がいち早く示される (v. 792) のと好対照をなす。

(6a) この数字は、導入部まで含めると、それぞれ18行, 27行となる。

(7) 従来の主な説をごく大まかに分類整理すると、次のようになる。

アエネアースを鼓舞するだけの十分な要素がマルケッルスにあるとするもの: M. von Albrecht, Vergils Geschichtsauffassung in der Heldenschau, WS 1(1967), 156-182; F. Dupont et J.-P. Neraudau, Marcellus dans le chant VI de l'Énéide, REL 48(1970), 259-276. ローマの偉容を謳歌した先行部分の高慢さを和らげる counterbalance だと考えるもの: R. D. Williams, The Aeneid of Virgil, Books 1-6, London/Basingstoke 1972, ad

Aen.6.854f.; S.V.Tracy, *The Marcellus Passage* (Aeneid 6.860-886) and Aeneid 9-12, *CJ* 70(1974/75), 37-42; R.G.Austin, *P.Vergili Maronis Aeneidos Liber Sextus*, Oxford 1977, ad Aen.6.854-892. ローマの興隆の陰で犠牲になった若者たちを象徴する（以後の巻においてもラウスス、パッラース、カミッラ等この類型に属する登場人物が見受けられる）とみるもの： B.Otis, *Virgil. A Study in Civilized Poetry*, Oxford 1964, 303; Kraggerud, *Aeneisstudien*, Oslo 1968, 101 n.235; Basson, *Pivotal Catalogues in the Aeneid*, Amsterdam 1975, 90; M.Owen Lee, *Fathers and Sons in Virgil's Aeneid*, Albany 1979, 68, 82, 91, 154-155. (なお、注 21 に挙げた Burke, Jr. の論文最終ページ、注 36 をも参照.)

(8) 『アエネーイス』中でティベリス河がローマの歴史の連続性の象徴として登場することについては、V.Buchheit, *Vergil über die Sendung Roms*, Heidelberg 1963, 178, G.Binder, *Aeneas und Augustus*, Meisenheim am Glan 1971, 105-111, esp.108 を参照.

(9) J.Marquardt, *Das Privatleben der Römer*, Darmstadt 1980(=Leipzig 1886), I, 356 参照.

(10) テクストは、D.A.Russell and N.G.Wilson(edd.), *Menander Rhetor*, Oxford 1981, 170-179 に収められている（希-英対訳）.

(11) Norden, *op.cit.*, 341-343.

(12) F. De Ruyt, *L'élégie de Marcellus dans l'Énéide: rhétorique ou lyrisme?*, *LEC* 2(1933), 138-144.

(13) Norden, *op.cit.*, 312-313.

(14) E.Skard, *Die Heldenschau in Vergils Aeneis*, *SO* 40(1960), 56. 更に次の点に留意する必要もあろう. すなわち、ホメーロスの「城壁よりの物見」では、プリアモスとヘレネーの対話形式で叙述が進行するのに対し、『アエネーイス』での英雄の紹介は、ほとんど最後までアンキーセースのモノローグである. また、ホメーロスでは、その場に居合せたアンテーノールが口を差し挟むけれども、アエネーアースの隣に立っている筈のシビュッラは終始無言であって、その存在そのものが完全に掻き消えてしまっている.

(15) G.N.Knauer, *Die Aeneis und Homer*, Göttingen 1979, 123-129.

(16) Skard, art.cit., 53-65. なお、これとは別に、アウグストゥスが forum に作らせたローマ人群像との関連を説く論もあるが、論証のための史料に乏しく、推測の域を出ない (T. Frank, Augustus, Vergil, and the Augustan Elogia, AJPh 59[1938], 91-94, H. T. Rowell, Vergil and the Forum of Augustus, AJPh 62[1941], 261-276) .

(17) Skard, art.cit., 62.

(18) このマスクがデスマスクかどうかについて、実は両説がある (いずれにせよ、蠟製であつたらしい) . E. Bethe, Ahnenbild und Familiengeschichte bei Römern und Griechen, Osnabrück 1974 (=München 1935), 8-9 (デスマスク説), J. M. C. Toynbee, Death and Burial in the Roman World, London 1971, 47-48 (非デスマスク説) を参照. ここでは仮にデスマスクとした.

(19) pompa funebris については、なお J. Marquardt, op.cit., 351-357, E. Bethe, op.cit., 1-5 を参照. ポリュビオスは紀元前 2 世紀の人であるが、彼の記すローマ人の葬儀の様子は、アウグストゥスの頃でもそれほど変わっていなかったと思われる.

(20) W. P. Basson, Pivotal Catalogues in the Aeneid, Amsterdam 1975, 43 n. 22. なお, Highet はこの点, アポッローニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』第 1 巻の英雄の集結をモデルとしたものとする (G. Highet, The Speeches in the Aeneid, Princeton 1972, 241) .

(21) P. F. Burke, Jr., Roman Rites for the Dead and Aeneid 6, CJ 74(1978/79), 220-228 は 'tumulus' を '(墓としての) 塚' と解釈している. 「ローマの英雄のカタログ」は実は死せるアンキーセースが生けるアエネーアースの葬儀を執り行なっているのだとする彼の珍説は、これによって 'tumulus' の上のアエネーアースと 'tumulus' の中のマルケッルスを結びつけたことに由来するもののようである.

(22) W. Kierdorf, Laudatio funebris. Interpretationen und Untersuchungen zur Entwicklung der römischen Leichenrede, Meisenheim am Glan 1980, 117-118.

(23) Skard, art.cit., 64.

(24) ただし、この逸話には異伝があり、それによると、ウェルギリウスがあまりに表情豊かに朗読をしたためアウグストゥスとオクターウィアは涙が止まらず、詩人が終了を宣しなかったならば朗読中止を命じようとしただろうというに過ぎない(Serv. ad Aen. 6.861). また、これにより詩人が莫大な報酬を得たとの伝もある(Serv. ibid.)が、E.Kraggerud, *Aeneisstudien*, Oslo 1968, 101 n.235 はこれを信憑性なしとして一蹴している。(なお、15世紀の写本に書き込まれた付注 [Donatus auctus ad Vit. Suet. 32] によると、その額は1行につき1万セーステルティウス(!).)

(25) Skard 説への批判としては、Basson, op.cit., 40, Hightet, op.cit., 241.

(26) Skard, art.cit., 64.

(27) 本稿末尾の[補説]を参照されたい。

(28) A.Cartault, *L'art de Virgile dans l'Énéide*, Paris 1926, I, 485-487.

(29) 'sic tota passim regione uagantur / aeris in campis latis atque omnia lustrant.' (Aen. 6.886-887).

(30) また、T.Ladewig, C.Schaper und P.Deuticke(edd.), *Vergils Gedichte*, Dublin/Zürich ¹⁴1973(=1³1912), II, ad Aen. 6.886f. も同様の疑問を表明しているほか、v.886-887 'sic....lustrant' を真正でないとして削除する意見のあることを伝える。

あるいは、Henry がいみじくも指摘した、v.863 'comitatur' とそのすぐあとの v.865 'comitum' の撞着がある。父祖マルケッルスに青年マルケッルスが随行し、この青年をさらに随行者たちが取り巻くという図は、なるほどいささか錯雑である。いかにも細を穿った指摘ではあるが、たしかにv.865 'strepitus' は明らかに子孫のほうにのみ向けられたものでなければならず、ここではすぐ前を歩む高名なる父祖の存在が無視されている (J. Henry, *Aeneidea*, Hildesheim 1969[=Dublin 1889], III, 447-448)。

(31) R.D.Williams(ed.), *The Aeneid of Virgil, Books 1-6*, London/Basingstoke 1972, ad 6.889.

(32) C.Cichorius, *Römische Studien*, Roma 1970(=Leipzig/Berlin

1922), 271-279.

(33) ホラーティウスの『カルミナ』第1巻第12歌はこの機会に作られたといわれる。

(34) V.Gardthausen, *Augustus und Seine Zeit*, Leipzig 1891, I, 722 は、アウグストゥスがこの婚礼を急いだ理由として、アウグストゥスの後妻リーウィアが自分の連れ子ティベリウスとユーリアをめあわせようとしたのではないかと推測する。

(35) *depositio barbae* については、J.Marquardt, *op.cit.*, II, 599-600, J.Carcopino, *Daily Life in Ancient Rome*, New Haven/London 1940, 160, Mau, RE, s.v. 'Bart' 参照。

(36) Vell.Pat.2.93.1, Sen.Cons. ad Marc.2.3, Id.Cons. ad Polyb.15, Tac.Hist.1.15. 更に、マケドニアの属州長官プリームスが、元老院の裁可なしでトラキアの部族と戦争を行なったとして訴えられたとき、彼はアウグストゥスまたはマルケッルスの中から命令を受けていたと申し開きをしたという事実も一つの証左と見做してよいだろう (A.H.M.Jones, *Augustus*, London 1980, 53 参照)。

(37) Dio 53.30.1-2, 53.31.1-32.1 がすでにこの推測を記している。

(38) Dio 53.31.2, Vell.2.93.1, Prop.3.18.13. なお Gardthausen, *op.cit.*, I, 729 を参照。

(39) Gardthausen, *op.cit.*, 730 を参照。

(40) 従って、ティベリウスは問題にならなかった。R.Syme, *The Roman Revolution*, Oxford 1939, 341, A.Heuss, *Römische Geschichte*, Braunschweig 1960, 304-312, を参照。

(41) R.D.Williams, *Technique and Ideas in the Aeneid*, New Haven/London 1983, 38-39 を参照。

(42) さらに「英雄のカタログ」が人物中心であるのに対し、こちらはどちらかというといふと集団の係わる事件を中心に題材が選ばれている（「サビーニー女性の掠奪」, 「ガッリア人の侵入と鷺鳥の注進」, 「アクティウムの海戦」, 「アウグストゥスの三重の凱旋」など）。

(43) J.W.Mackail(ed.), *The Aeneid*, Oxford 1930, ad Aen.6.883.

(44) アウグストゥスとオクターウィアの悲嘆のさまは、次のように詩にもうたわれたほどであった (Ps. Ov. Cons. ad Liv. 442-443) :

prisca quid huc repeto? Marcellum Octavia flevit
et flevit populo Caesar utrumque palam.

なぜ大昔の事をここに持ち出す必要がありましょう。マルケッルスのことをオクターウィアが泣き悲しんだではありませんか。

そしてこの二人をカエサルが人目も憚らず泣き悲しんだではありませんか。

実際、Grimal の推測によると、まさしく 前 23 年にアウグストゥスは‘世紀祭’ (Ludi Saeculares) を祝うつもりであったが、甥の急逝のため、延期を余儀なくされたという (P. Grimal, Le livre VI de l'Énéide et son actualité en 23 av. J.C., REA 56(1954), 40-60) .

また、オクターウィアの行状としてセネカ (Cons. ad Marc 2.4) の伝えるところでは、彼女はマルケッルス歿後その生涯にわたって泣き悲しむのを止めず、気を紛らそうともしなかったし、最愛の息子の像 (imago) を一切持とうとせず、その名を耳にすることさえ厭って、マルケッルスを記念する頌歌その他の称誉を拒絶、あらゆる慰めに対して耳を閉ざしたという。

(45) Gaheis, RE, s.v. ‘M. Claudius Marcellus(230)’ 参照.

(46) クリーナゴラスは前 15 年頃まで存命で、祝婚歌などの創作のあることが確認されるが、マルケッルス追悼の歌は書かなかったようだ。

[補説]

プルータルコス (Marc. 30) によれば、マルケッルスは aedilis 在職中に亡くなっている。その年はプリーニウス (N.H. 19. 24) によって前 23 年と確定される。この年にはアウグストゥスも一時病床に臥したことがあり、マルケッルスが病を得たのはアウグストゥスの平癒後程なくしてのことで、アウグストゥスの治療に手腕を揮った医師アントーニウス・ムーサも此度は

この青年の命を救い得なかったと云う (Dio 53.30.3-4) . その死の正確な日付は不明であるけれども、やはりプリーニウス (N.H.19.24) の記述から8月1日にはまだ存命であったことが知られ、さらにウェッレイユス・パテルクルスの報告 'M. Marcellus....magnificentissimo munere aedilitatis edito decessit admodum iuvenis' (2.93) に見える 'munus aedilitatis' とは aedilis が挙行の任を負っていた祭典 'Ludi Magni' を指すと考えられるから、マルケッルスは9月4-19日に催されたこの祭事後、すなわち前23年の9月下旬から暮れまでの間に歿したことになる。享年は18歳 (Serv. ad Aen.6.861) とも20歳 (Prop.3.18.15) とも伝えられている。

(以上, Gaheis, RE, s.v. 'M. Claudius Marcellus(230)', S. Jameson, 20 or 23?, Historia 18(1969), 204-229 などによる。)

一方、ウェルギリウスがアウグストゥスの前で『アエネーイス』の第2・4・6の3つの巻を朗読したとの伝があるが、遠征等のためローマを留守にしがちなアウグストゥスにウェルギリウスが自作の叙事詩を朗読して聞かせることのできる機会は限られたものであった。実際、アウグストゥスがカンタブリア遠征より帰還したあと再びローマを出立してシキリアへ赴くまで、つまり前24年の春～前22年の秋(9月)の期間しか考えられないのである。『アエネーイス』制作の進捗状況に関心を寄せるアウグストゥスが詩人に下書あるいは原稿の一部の送付を求めたのはこのカンタブリア遠征のさなかであり、詩人は創作の苦心を述べてこれを謝絶していることからみて (Vit. Suet. 31; Macr. Sat. 1.24.10-11), それ以前にどの巻かが朗読に耐えうる形にまで仕上がっていたとは思われない。他方、アウグストゥスが前22年にローマを離れたあと、両者が再会するのは3年後の19年、アテナイにおいてであるが、既に健康を害っていた詩人は帝とともに帰旅についたものの、遂に再びローマを見ることなくブルンディシウムに歿したのである。ところでウェルギリウスがアウグストゥスに朗読して聞かせた巻のうち、とくに第6巻については、先述の一件から、詩人の朗読手稿にはマルケッルスの死を悼む文言が既に盛りこまれていたことが証せられる。それゆえ、『アエネーイス』第6巻の朗読の行なわれたのはマルケッルス逝去後暫く経ってからとみななければならない。前23年暮れ～22年秋の間ということに

なろう。

しかし一方では、第6巻の全体がマルケッルス歿後の1年程の期間に集中的に書かれたと見做すべき根拠は何もなく、また靈感に左右されるところの大きかったウェルギリウス独特の気まぐれな作詩法を考えると（Suet. Vit. 22-23）、第6巻の制作が、巻頭から巻末へ順になされたかどうか疑わしい。とすれば、第6巻の、あるいは少なくとも「ローマの英雄のカタログ」の、一応の完成の後に詩人がマルケッルスの訃報に接した可能性があることになろう。